## ③「我日常彼非日常：ワレニチジョウ・カレヒニチジョウ」

令和６年11月吉日

白子　隆志

これは、約20年前に私が名古屋第二赤十字病院の救急部に勤務していた時に、石川清先生（のちに院長を経られ、現在東海学園長）が我々救急スタッフに日々伝えた言葉です。自分たちは日頃から救急（一般外来）をやっていて様々な病気を診ていて当たり前のことでも、救急（一般外来）を訪れる患者さんたちは、痛みと苦痛に怯えてやってきています。つまり、我々医療人にとって日常のことでも患者さんにとっては非日常的なことであり、それを我々が察してやさしく、誠意を持って対応しなさいという教えでした。

それ以来、私は当直や手術でいくら疲れている時でも、これは苦手な患者さんだなと思う時でも、心の中で「我日常彼非日常」と言い聞かせてやってきました。また、高山赤十字病院の研修医や救命救急センターの看護師、そして飛騨地域の救急隊の勉強会でもこの言葉をことあるたびに話してきました。

最近、自分でも想像できなかった介護保険に入る年齢になってみると体や心の不安があちこちに出てくるようになりました。自分が患者の立場で病院を受診すると、若いころには想像できなかった患者さんたちの不安な気持ちが身に染みるようになってきました。職員の皆さんには見慣れた当たり前の病院ですが、初めて受診する患者さんやご家族にとっては場所もルールもスタッフも慣れていない病院でとても不安なのです。皆さんも都会の病院を初めて受診したとすれば、きっと同じ経験をすると思います。また、新入社員での勤務開始の時期や、勤務交代などで初めて行く部署では仕事のやり方やスタッフの名前もわからず不安になると思いませんか？

長年同じ職場に勤務していると忘れてしまいがちですが、患者さんにも、周りのスタッフに対しても「我日常彼非日常」を心の中で是非呟いてみてください。